

日本細菌学会 関東支部ニュース

第31号

第79回日本細菌学会関東支部総会のご案内 ——若い世代のためのノーネクタイ、運動靴履きの学会——

第79回日本細菌学会関東支部総会は平成10年7月10・11日、“いこいの村あしがら”にて行うことにしています。最近ではO-157感染症などの新興感染症、結核などを含む再興感染症、多剤交叉耐性菌感染症及びコレラ菌等の輸入伝染病など、感染症の話題が報道に取り上げられることが多い。それは、無くなっていた感染症が急に出現した訳ではなく、これまでに存在していた（知られていた）感染症及び耐性菌等が多発的に見出されるようになったことである。それではこのような細菌感染症が出現するようになって来たという背景には、細菌学者が感染症に対して手をこまねいて見て居たせいであるかということ、それは大いに違うのである。細菌学者の日夜たゆまぬ研究にもかかわらず、必ずしも予測し兼ねるような感染症が多発することが多くあるということである。即ち細菌側の変化、適応は時として研究者の研究の速度よりも早いということかも知れない。

それではそのような速い細菌の変化、新興、再興感染症に対応するにはどうしなければならないかということが問題となる。多くの考えがあると思うが、一つの確実な方法は多くの新しい問題に対応できるような研究者の育成であろうと考える。そのような事も心の隅にあって、今回の第79回日本細菌学会関東支部総会では比較的若い研究者によるシンポジウムを企画した。シンポジウムは4つのテーマに分け、それぞれのシンポジウムの企画、構成を40歳未満の研究者にお願いをした。各シンポジウムの企画、構成は次の通りである。

総会長 中江 太治

東海大学医学部 分子生命科学部門



若手研究者によるシンポジウムⅠ

“感染と宿主応答”

オーガナイザ：戸辺 亨

(東大・医科研・細菌感染)

- 1：戸辺 亨 (東大・医科研・細菌感染)
腸管病原性大腸菌の上皮細胞付着と細胞応答
- 2：川上 貴敏 (北里大・薬・微生物)
Salmonella の宿主細胞への感染とその応答
- 3：竹下玲、花澤重正、北野繁雄
(明海大・口腔微生物)
歯周病原性細菌 *Porphyromonas gingivalis* の歯周組織への付着とその応答性
- 4：加藤 秀人 (東京女子医大・微生物免疫)
細菌性スーパー抗原によるT細胞活性化と疾患の発症—最新の話題
- 5：善本 隆之 (東大・医科研・アレルギー)
マラリア感染における防御免疫機構

若手研究者によるシンポジウムⅡ

“細菌の毒性と病原性”

オーガナイザ：林 哲也

(信州大・医・細菌)

- 1：田中義正、内山竹彦
(東京女子医大・微生物免疫)
非定型好酸菌由来の新規非ペプチド
抗原の解析
- 2：桜井 直美(茨城県立大
・保健医療・医科学センター)
*Bacillus cereus*の産生する毒素と食
中毒
- 3：大西 真(信州大・医・細菌)
ポア形成毒素：緑膿菌サイトトキシ
ンの機能解析
- 4：岩城 正昭(国立感染研・細菌
・血液製剤部・細菌製剤第2室)
百日咳菌アデニル酸シクラーゼ毒素：
その作用機構とツールとしての応用
の可能性
- 5：菅井 基行(広島大・菌・細菌)
低分子量G蛋白質を修飾する細菌毒素

若手研究者によるシンポジウムⅢ

“化学療法の新しい問題点”

オーガナイザ：米山 裕

(東海大・医・分子生命科学)

- 1：風間 仁(昭和薬科大・微生物)
菌体外排出による消毒剤耐性機構
—グラム陰性菌を中心として—
- 2：花木 秀明(順天堂大・細菌)
VRSAの耐性メカニズムとその検出
方法
- 3：小野寺 宜郷
(第一製薬・創薬第一研)
キノロン耐性とDNAジャイレース、
トポイソメラーゼの変異
- 4：増田 修久(三共・第二生物研)
緑膿菌の β -ラクタム剤耐性変異
- 5：額賀 路嘉
(千葉大・薬・微生物薬品化学)
 β -ラクタマーゼのオキシイミノ系
 β -ラクタム剤に対する適応変異
- 6：米山 裕(東海大・医・分子生命科学)
緑膿菌の薬剤排出による多剤耐性

若手研究者によるシンポジウムⅣ

“新しい感染症と古くて新しい感染症”

オーガナイザ：山崎 伸二(国立国際医療
センター研究所・細菌熱帯病)

- 1：中尾 浩史、Tanja Popovic
(国立小児医療研究センター、CDC,
NCID, DBMD, MSPB)
ジフテリアの再流行
- 2：増澤 俊幸(静岡県立大・薬)
分子疫学的アプローチによるライム
病ボレリアの世界的分布の解析
- 3：山口 博之(杏林大・医)
Helicobacter pylori 熱ショック蛋
白HSP60の病態形成における役割
- 4：寺嶋 淳(国立感染研)
O157：H7を中心としたEHECの最
近の動向
- 5：山崎 伸二(国立国際医療センター
研究所・細菌熱帯病)
O139コレラ菌の出現とその後

一般演題に関しては何等制限は設けていな
いので細菌に関する研究結果であれば何でも
ふるって応募して頂きたいと考えています。
願わくば、これも若い世代の研究者に多くの
演題を出して頂き、科学的思考を発表する練
習の場として利用して頂きたいと考えていま
す。

本学会ではこれらの科学的プログラムの他
に遊びの時間もとってあります。学会プログ
ラムに見られるように第一日目の午後約3時
間と第二日目の午後約3時間を遊びの時間と
してとってあります。テニス、サッカー、野
球などの球技、ジョギング、及び山歩きなど
が出来ますので、是非運動靴履きで御参加頂
きたいと考えています。第一日目の夜は夕食
を兼ねた懇親会を予定しております。大いに
懇親を深めて頂きそしてお泊まり頂きたいと
考えております。

尚、会場は小田急線大井松田駅を經由して
来れますが交通の便は必ずしもよくありませ
ん。自動車ですと東名大井松田出口から約10
分位の所です。駐車場は充分ありますし無料
のようです。

第80回日本細菌学会関東支部総会に向けて

日本医科大学老人病研究所免疫部門

大 国 寿 士

所謂、“新興・再興感染症”として一括される新しい感染症が多数出現し、また、既に消えたかに見えた既知の感染症が再び流行し始め、世界的脅威となって来ております。この国際的に人の動きが活発な時代に、その対応を誤まれば、これら感染症は世界的規模で流行する危険性があります。今日、かかる感染症の制圧は社会的に強く要請されているところであり、その発病機構の解明と共に、新たな発想に基づく治療剤の開発と予防法の確立が強く望まれています。この様な状況の中で、第80回という佳節を迎えた関東支部総会をお引き受けすることは身の引き締まる思いで一杯であります。

今回はシンポジウムの一つに“新興・再興細菌感染症の現状と研究の進歩”を取り上げました。企画と司会を内山竹彦教授（東京女子医大微生物免疫）と丸山務教授（麻布大環境保健学部）にお願いし、腸管出血性大腸菌感染症をはじめ、結核の現状と結核菌研究の進歩など、話題の感染症を幾つか取り上げて頂き、その現状とこれからの対策について論じて頂く予定です。

また、今回は第47回日本感染症学会東日本地方会総会（会長：国立東京第二病院小児科砂川慶介部長）と第45回日本化学療法学会東日本支部総会（会長：日大医学部第三外科岩井重富教授）との合同でシンポジウムを企画し、“腸管感染症の基礎と臨床”と題し、井上松久教授（北里大医学部微生物）と入交昭一郎先生（川崎市立病院院長）に企画と司会をお願いしております。昨年の第78回支部総会（会長：国立小児医療研究センター感染症研究部竹田多恵部長）ではこの三学会が同一会場で、同時開催し、従って、先生方の会場での移動もスムーズに行われ、感染症学会東日本地方会の入交会長と化学療法学会東日本支部総会井上会長のご協力もさることながら、竹田会長は見事な学会運営をされ、合同

シンポジウムは大変スムーズに行われました。しかし、第80回支部総会においては諸般の事情により、二学会と同一会場で、同時開催することが出来ず、合同シンポジウムでは会員の先生方にかなりのご迷惑をおかけすることになります。

第80回支部総会は平成10年11月25、26日の2日間を予定し、四ツ谷駅（JR中央線、地下鉄丸ノ内線）前の「スクワール麹町」が会場となります。四ツ谷駅麹町口から徒歩2分のところにありますので、大変便利のよい所です。第一日目午前是一般演題の発表をして頂き、午後は特別講演を千葉大医学部高次機能制御研究センターの谷口克教授にお願いし、“胎児期から出現する新しい免疫系：V α 14 NKT 細胞”と題してお話頂くことにしております。先生のNatural Killer T-細胞のご講演は感染免疫学を理解する上で、極めて重要な示唆を与えるものと期待されます。次いで、シンポジウム“新興・再興感染症の現状と研究の進歩”を開催し、午後6時過ぎから懇親会を予定しております。

第二日目は午前中は一般演題を口演して頂き、午後は会場を移して、東京プリンスホテルにて、三学会合同のシンポジウム“腸管感染症の基礎と臨床”を開催します。先生方にはご面倒でもそちらに移動して頂くこととなります。この関連学会との合同シンポジウムの開催は“学会の活性化”を図ることを目的としており、これはまた、“研究の活性化”でもありますので、基礎と臨床の先生方が互いに議論し合い、実りあるシンポジウムになればと期待しております。この合同シンポジウムは細菌学会支部総会のネームプレートで参加出来ることになっておりますので、多数の先生方のご参加をお待ち申し上げます。一般演題も奮って応募されますようお願い申し上げます。

フ ォ ー ラ ム

本号からこのコーナーでは細菌学および関連分野において、最近話題となったテーマについて取り上げることにしました。今回は「インフルエンザ」について、会員外の先生方3名に書いていただきました。この試み、あるいは取り上げるテーマについてのご意見を支部事務局までお寄せ下さい（編集委員会）。

インフルエンザウイルスの変異

東京都立衛生研究所

ウイルス研究科

関根大正

昨年秋以来、香港で出現した新型インフルエンザウイルスに関連した報道が新聞、テレビなどマスコミを賑わした。ここ数年、1968年に現れて以来の主要流行株であるA香港型ウイルス（A香港H3N2）が、鶏赤血球の凝集能の低下、鶏卵での増殖能低下、地球規模での伝播速度の低下など、生物学的性状を変化させており、インフルエンザの専門家は、過去において世界的大流行をもたらした、抗原性の不連続変化の出現に対する警戒を呼びかけていた。

香港政府は8月に、5月に死亡した3歳男児よりトリ型インフルエンザウイルス（H5N1）が確認されたと発表した。その時点ではあまり注目されなかったが、11月末に二人目の患者が発生すると次々と感染者（18名）及び死亡例（6名）が出現した。

H5型のトリ型インフルエンザウイルス（H5N3）は1961年に南アフリカで見つかったものが最初だが、トリからヒトへの直接の感染が確認されたのは今回初めてである。死亡した男児から分離されたウイルスの遺伝子を米国感染症センターで分析したところ、遺伝子は全てトリのウイルス由来のもので、ヒトや他の動物のウイルス由来の遺伝子との組み換えは確認されなかった。このウイルスの特徴として、ウイルスの感染力、病原性を決定するヘマグルチニンが、従来のものよりアミノ酸が4個多く、そのアミノ酸の加わった部分で切断されやすい構造をしており、そのことが感染性、病原性を増強させていると考えられている。

日本では今冬期は全国的にA香港型（H3

N2）が流行しているが、集団発生分離株の中に泰州及び北米で前年に観察された抗原性を異にする株が相当数含まれている。今冬期に多数観察されたインフルエンザによる死亡例や重症脳炎例とどのように関わっているかは今後の検討で明らかにされることになる。

インフルエンザワクチンの有効性

社団法人 北里研究所

基礎研究所・ウイルス第1研究室

中山哲夫

毎年インフルエンザのシーズンには、ワクチンの効果についてなにかと問題になる。大流行とともに脳症による子供たちの死亡例が話題となった。昨年度の老人ホームでのインフルエンザの流行といい、昨今のインフルエンザが特別かとの印象を受けるが、実はこれまでもおこっていたことで、千人以上が毎年インフルエンザで死亡している。

ワクチン効果について論ずるとき、ワクチンにより免疫能を獲得すると、全く感染しないと考えられてきた。麻疹等の生ワクチン接種でもそう考えられてきたが、実際には流行期には感染をおこしているものの発症には至らない。従って発症をおさえるという意味では麻疹ワクチン等は有効である。インフルエンザワクチンを受けていても、インフルエンザ様症状を呈した患者からウイルスが分離され、感染をおこし発症もしている。インフルエンザウイルスは主として呼吸器感染のウイルスであるが、肺炎、脳症、筋肉炎、心筋炎等が合併症として認められ、むしろ全身性ウイルス感染症としてとらえるべきである。上気道の感染防御にはIgA抗体が必要であるが、現行のインフルエンザワクチン皮下接種により血中のIgG抗体は上昇するが、IgA

抗体は誘導しにくい。従って感染をおさえることはできないが、血中のIgG抗体によりウイルス血症をおさえ、全身への散布をおさえることができる。このためワクチン接種者では重症化する事は少なく、こうした観点からワクチンの臨床有効率は70%で、特に入院阻止率では30-70%の効果といわれている。これまで我が国では家庭にインフルエンザを持ち込む学童を対象にワクチンを集団接種してきたがインフルエンザはコントロールできず、ワクチンの評価は極めて低い。一方、欧米各国では老人に対してインフルエンザワクチンを無料で接種し老人医療費の削減を目指している。

仮に、新型インフルエンザが流行するとすれば、3,000万人が罹患すると想定され、現在の製造能力以上のワクチンが必要とされる。ワクチンは感染症に対する有力な武器であり、緊急時には外国からの輸入をあてにすることはできない。ワクチン製造能力の整備とともに、的確な流行株予測のために世界的視野のインフルエンザサーベイランスの強化が望まれる。

癌とインフルエンザウイルス感染

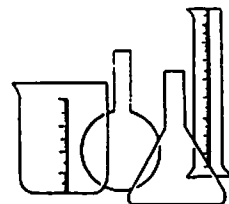
東京薬科大学

薬学部・第二生化学教室

大山 邦 男

今年も猛威を奮ったインフルエンザがやっと下火になりました。私たちがインフルエンザに罹ったときの典型的な症状の一つとして咽の痛みがありますが、咽にはインフルエンザウイルスが最初に接触するための特別な物質でも存在するのでしょうか。私たちの教室ではヒトの臓器や細胞に存在するインフルエンザウイルスとの反応性を持つ糖タンパク質について検討しています。ヒトの赤血球膜にインフルエンザウイルスと反応性を持つシアロ糖タンパク質が存在することはずいぶんと古くから知られていましたが、私たちの検討から、ヒトのさまざまな臓器や組織、例えば、消化器官や肝臓、膵臓、血清などにもこれら

の物質があり、特に精漿中には非常に強い活性物質の存在が示されました。また、胎児由来組織である羊膜、胎児性の物質を含む胎便、羊水中には精漿よりもっと活性の強い物質が存在します。さらに肝臓癌、膵臓癌、卵巣癌、肺癌などの癌患者さんからの原発性あるいは転移性癌組織、囊胞液、腹水などにも活性物質が存在し、原発部位に相当する正常組織よりも数段強い活性を示します。ちょっと驚くことに、卵巣腫瘍などは悪性度が強くなるほど反応性が強いことがわかりました。これらの現象は、胎児性物質、あるいは癌組織や癌細胞がつくる糖タンパク質には成人の正常組織がつくるものよりもインフルエンザウイルスの結合に必須の成分であるシアル酸が多く含まれる傾向のあることがわかっています。しかし、ある種のシアロ糖タンパク質分子を断片化し、各々の反応性を調べるとシアル酸を多く含む画分が必ずしも強い結合性を示すとは限らないことがわかります。このことからシアル酸が多ければ必ずしもその分子の反応性が強いとも言えません。胎児性や癌組織由来の物質がインフルエンザウイルスと比較的に強い反応性を有することにはもう少し複雑なメカニズムがありそうです。癌の患者さんがインフルエンザウイルスに感染しやすいという話はあまり聞いたことがありませんが、癌組織に存在するインフルエンザウイルス反応性物質には胎児性抗原という意味からも、このウイルスと細胞上のレセプターとの反応機構を明らかにする鍵のようなものが隠されているような気がします。



集 会 案 内

○第7回内毒素・LPS研究会

日 時：平成10年6月27日(土) 13:00～17:00
場 所：北里研究所(東京都港区白金5-9-1)
問 合 せ 先：熊沢義雄 北里大学・理学部生体防御学教室
TEL、FAX 0427-78-9534

○第9回日本生体防御学会総会

日 時：平成10年7月22日(水)～24日(金)
場 所：仙台市戦災復興記念館(仙台市青葉区大町2-12-1)
総 会 長：森 勝義 東北大学大学院・農学研究科水圏生物生産科学講座
問 合 せ 先：第9回日本生体防御学会総会事務局 高橋計介
TEL 022-717-8726、FAX 022-717-8727

○第45回毒素シンポジウム

日 時：平成10年7月29日(水)～31日(金)
場 所：富士見グリーンカルチャーセンター
(長野県諏訪郡富士見町)
世 話 人：寺脇良郎 信州大学・医学部細菌学教室
問 合 せ 先：第45回毒素シンポジウム事務局 林哲也(又は大西真)
TEL 0263-37-2615、FAX 0263-37-2616

○第27回薬剤耐性菌シンポジウム

日 時：平成10年8月28日(金)～29日(土)
場 所：水上ホテル聚楽(群馬県利根郡水上町)
会 長：佐藤謙一 第一製薬株式会社・創薬第一研究所
問 合 せ 先：事務局 群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設
伊豫部志津子、大久保豊司
TEL 027-220-8085、FAX 027-220-8088

○第14回「細菌の病原性とその分子遺伝学」研究会

日 時：平成10年9月5日(土) 13:00～22:00
場 所：大塚比叡山荘(大津市比叡平1-43-29)
世 話 人：太田美智男 名古屋大学・医学部細菌学教室
問 合 せ 先：事務局 北里大学・薬学部微生物学教室 岡田信彦
TEL 03-3444-6161(内) 3321、FAX 03-3444-4831

○第43回ブドウ球菌研究会

日 時：平成10年9月10日(木)～11日(金)
場 所：角筈区民ホール(東京都新宿区西新宿4-33-7)
世 話 人：五十嵐英夫 東京都立衛生研究所・微生物部
問 合 せ 先：第43回ブドウ球菌研究会事務局 遠藤美代子
TEL 03-3363-3231(代)、FAX 03-3368-4060

海外会員便り

東京女子医科大学

微生物学・免疫学教室

秋山 徹

教室の皆様をはじめたくさんの方々のご助力のおかげで何とか始めたボストンでの生活もまもなく1年になろうとしています。今年の冬は例年になく雪が少なく寒いのが嫌いな私としては助かりました。

私は職場から程近いstudio（日本で言うワンルーム）タイプの部屋に住んでいます。ボストン到着時に秘書さんが比較的安い宿を手配してくれていたのですが、それでも一泊\$80程度でした。日本からInternetでボストン界隈のstudioの家賃を調べると\$1,000以下でしたので、「部屋探しに手間取ってここに10日泊まっていたら一ヶ月分の家賃になってしまう」という焦燥感に駆られ、ボストンについた翌日には街で目に付いた一軒目の不動産屋に飛び込みました。そして非常に怪しい英語で今の部屋を紹介してもらったのですが、契約の途中で私の収入が予想外に少ないことに驚いた不動産屋が大家さんと交渉してくれ家賃をまけてもらうことが出来ました。なんだか情けない話ですが「アメリカで暮らしていけるかも知れない」と実感した瞬間でした。

私のラボはLongwood medical areaと呼ばれるハーバード大学医学部などの教育関連施設群、および多数の医療機関が集まったエリアのほぼ中央に位置するボストン小児病院（Children's Hospital, Boston）内にあります。実際の所属は少々複雑で、Haward

Hughes Medical Institute、ハーバード大学医学部微生物・分子遺伝学、そして前述のボストン小児病院の3ヶ所となります。現在はBruce J. Mayer博士のラボにてSH2・SH3アダプター蛋白質の細胞内シグナル伝達における役割の研究を行っております。日本では常に細菌と関わる研究を行っていましたが、こちらではアフリカツメガエルを使った実験や動物細胞を使ったシグナル伝達の実験など日本では経験の無かった分野の研究を行っており、ようやく慣れてきたところです。研究機器などは日本と比べて特に充実しているとは思いますが、必要なものがコンパクトにまとめられていて機能性に優れた研究環境がある、また似たような分野の研究を行っているラボが歩いて数分のところにあるため、アドバイスをもらったり材料を分与してもらったり、といった共同研究を行うことが当たり前、且つ容易な環境がある、というのが印象的です。

というわけでどっぷりと「研究」に浸かった日々を過ごしています。残りの留学生生活を有意義なものにするためさらに努力するつもりです。



第78回日本細菌学会

関東支部総会報告

国立小児医療研究センター感染症研究部

竹田 多恵

平成9年10月30日（木）と31日（金）、横浜ランドマークタワー内、ホテル横浜ロイヤルパークニッコーで、第78回関東支部総会を開催した。第46回感染症学会東日本地方会（会長入交昭一郎先生）と第44回化学療法学

会東日本支部総会（会長井上松久先生）との同時開催を準備することが出来た。一般演題は細菌学会独自で進行し、32題をすべて口頭発表でお願いした。シンポジウムは細菌学会独自の「腸管出血性大腸菌O157-基礎と臨床を繋ぐ」（司会林英生先生、渡辺治雄先生）と、3学会合同の「感染症起因菌の変遷と将来展望」（司会松本文夫先生、竹田多恵）と題して開催した。学会への参加費は5,000円。但し、他の2学会にも所属している会員

についてはそれぞれの学会で登録をお願いした(10,000円)。学会期間を通じて参加者総数は約200名。シンポジウムでは他の2学会からの参加者も多く、活発な質疑が続いた。懇親会も3学会合同で行った。

3学会合同開催の試みとして、第76回の支部総会に続く学会となり、一步前進した合同学会の形式を取ることはできたが、完全な形の合同学会には至らなかった。反省として、(1)一般演題はすべて細菌学会独自の会場で行わざるを得なかった。(2)会の運営もそれぞれ独立したものとなったために、抄録、ポスター、ネームプレート等は別個に準備する事となった。(3)参加費をどのように設定するかは、尚困難な問題として残っている。(4)合同シンポジウムでは臨床に偏った細菌学が重視される傾向がある。などである。しかし、同じ会場で同時期に3学会会員が合流できる機会は貴重なもので、学問の進展には意義深いと思われた。他の2学会の会員に、細菌学会の研究成果を知っていただくためにも良い機会と考えられた。

~~~~~ 議 事 録 ~~~~~

平成7～9年 第12回日本細菌学会 関東支部評議員会 議事録

日 時：1997年10月30日(木) 12時～13時

場 所：横浜ロイヤルパークホテルニッコー

出席者：新井俊彦、池田達夫、伊藤 武、
伊豫部志津子、内山竹彦(支部長代理)、江川 清、大国寿士、川原一芳、近藤誠一、佐藤謙一、平松啓一、水口康雄、宿前利郎、山本友子、竹田多恵(第78回総会長)、長井伸也(幹事)、古西清司(幹事)、加藤秀人(新幹事)

欠席者：井上松久、梅本俊夫、奥田克爾、野田公俊、辨野義己、松浦基博、吉川昌之介(支部長)

1. 関東支部新旧評議員会(旧第11回)議事録の承認

関東支部新旧評議員会(旧第11回)議事録

については異議なく承認された。

ただし内容が長いので、支部ニュースにはこれを要約して掲載することが了承された。

2. 会員の現況報告

平成9年9月30日現在の会員数は、正会員1,557名(対前年91名増)である。

3. 会務報告

内山支部長代理から総会における報告事項(新評議員、新支部長の決定及び紹介)についての説明があった。

4. 会則変更

以下の会則の変更について、支部総会にて承認を得ることとなった。

選挙細則(旧) 選挙権者は選挙施行の年の前年の12月末日以前に本支部会員となったもの、また被選挙権者は選挙施行の年の6年前の12月末日以前よりひきつづき本支部会員であったものとする。

(新) 支部評議員選挙は、選挙施行の2年前の年末を基準にして発行される本部評議員選挙有権者名簿に登載された者を選挙権者、被選挙権者とする。上記名簿に関して本部に異議申し立てをし、認められた場合は支部においてもこれを有効とする。

付則(旧) 本会則は平成8年11月14日よりこれを実施する。

(新) 本会則は平成9年10月30日よりこれを実施する。

5. 第79回、80回、81回、82回支部総会長選出

第79回総会長の中江太治教授(東海大学)、第80回総会長の大国寿士教授(日本医大)、第81回総会長の平松啓一教授(順天堂大学)、及び第82回総会長の林英生教授(筑波大学)についてそれぞれ支部総会で承認を受けることになった。

6. 平成9年度決算報告、7. 会計監査報告 および8. 平成10年度予算案審議

決算の大部分(平成9年9月27日迄)については先の評議員会にて了承されたところであるが、最終的な決算についての監査が終了したことが新井、宿前両監査より報告され、これについて了承された。以上、平成9年度決算、会計監査報告、平成10年度予算につい

て総会での承認を受けることとなった。

平成9～12年 第1回 日本細菌学会 関東支部評議員会 議事録

日時：1998年1月13日（火）午後2～5時

場所：東京女子医科大学中央校舎

1F会議室

出席者：安部茂、今西健一、内山竹彦（支部長）、大国寿士、奥田研爾、小原康治、加藤哲男、川原一芳、笹原武志、佐竹幸子、笹川千尋、田中重則、平松啓一、益田昭吾、松浦基博、丸山務、森田耕司、宿前利郎、山田澄夫、渡辺治雄、中江太治（第79回 総会長）、林英生（第82回 総会長）、加藤秀人（幹事）

欠席者：梅本俊夫、山口恵三

1. 評議員自己紹介

2. 新評議員会の運営について

（1）予算：平成9年度の決算報告および平成10年度の予算について、内山支部長より説明。次回もこの予算案について検討する予定である。

（2）会則：前期評議員会において支部評議員選出に関する選挙細則に変更があったことについて、内山支部長より説明があった。すなわち、「これまで選挙権者は選挙施行の年の前年の12月末日以前に本支部会員となったもの、また被選挙権者は選挙施行の年の6年前の12月末日以前よりひきつづき本支部会員であったものとする」が、「選挙施行の2年前の年末を基準にして発行される本部評議員選挙有権者名簿に登録された者を選挙権者、被選挙権者とする」と改訂された（平成9年10月30日より実施）。

（3）合同学会：2年前より、日本細菌学会関東支部総会、日本化学療法学会東日本地方会、および日本感染症学会東日本地方会の合同学会を開催する努力がなされており、今までの経緯について内山支部長より説明があった。今後も2年毎の合同学会開催へ努力する

方針である。平成12年の合同学会（予定）にむけて日本細菌学会関東支部総会総会長を決める時期がきている。

3. 委員会の組織と構成について

編集委員会（川原委員長）、将来計画委員会（平松委員長）、合同学会委員会（大国委員長）、学術集会委員会（宿前委員長）の各組織構成と役割について、内山支部長より説明があった。合同学会委員会に関して、学会間の連絡協議会をつくったらどうかとの提案があり、今後検討することとなった。

4. 会計監査の選出

投票にて、宿前委員と平松委員の2名が選出された。

5. 新旧評議員の引継時期について

現在、会計年度は10月1日から翌9月30日となっているが、慣例から現評議員の任期は平成12年10月ないしは11月の評議員会をもって終了する予定であり、次期評議員会に引き継ぐ時にはすでに予算が決定されていることになり好ましくないのではないか、との問題提起が内山支部長よりなされた。できれば、評議員の任期は9月までとし、また、次期予算について新評議員がある程度関与できるような形が望ましいと思われるので、今後の検討課題とすることとなった。

7. 総会準備状況について

（1）第79回総会（夏）：中江総会長より順調に準備が進んでいる旨、報告された。平成10年7月10、11日神奈川県いこいの村あしがらにて開催される。

（2）第80回総会（秋）：大国総会長より報告。平成10年11月25、26日に日本化学療法学会東日本支部総会と日本感染症学会東日本地方会総会との合同シンポジウムが開催される。日本化学療法学会・日本感染症学会の開催地が東京プリンスホテルに決定していて同ホテルでの場所確保が不可能だった為、スクワール麹町にて開催することとなり、総会長選出時期を早めることの必要性が実感された。参加費については日本化学療法学会・日本感染症学会が1万円であることを考慮して検討中である。

（3）第81回総会（夏）：平松総会長より報

告。場所は未定。

(4) 第82回総会(秋)：林総会長より報告。
場所は未定。

〈評議員会からのお知らせ〉

—各種委員会の組織について—

第1回評議員会議事録にもありますように
今期の評議員会は以下の組織で活動すること
になりました。どうぞよろしく願います。
(○印は委員長)

将来計画委員会：○平松啓一、梅本俊夫、
奥田研爾、笹川千尋、益田昭吾、
丸山 務
合同学会委員会：○大国寿士、安部 茂、
笹原武志、森田耕司、山口恵三
学術集会委員会：○宿前利郎、今西健一、
田中重則、山田澄夫、渡辺治雄
編集委員会：○川原一芳、小原康治、
加藤哲男、佐竹幸子、松浦基博

〈受賞のお知らせ〉

昨年と本年の日本細菌学会総会(第70回、
第71回総会)において、関東支部会員の先生
方が受賞されましたのでお知らせいたします。
おめでとうございます。なお、研究内容の
詳細については日本細菌学雑誌をご覧下さい。

平成8年度浅川賞受賞

久恒和仁 城西大学薬学部微生物学教室
「ビブリオ科細菌、とくに*Vibrio cholerae*
と腸炎ビブリオのリボ多糖体の化学的、
免疫化学的性状と化学分析に関する研究」

平成8年度黒屋奨学賞受賞

清水 徹
筑波大学基礎医学系微生物学講座
「ウェルシュ菌における毒素産生調節機構
の解析」

平成9年度浅川賞受賞

竹田美文 国立国際医療センター研究所
「大腸菌が産生する下痢原因毒素の研究」

平成9年度小林六造記念賞受賞

花澤重正
明海大学歯学部口腔微生物学講座
「*Porphyromonas gingivalis*による炎症
性骨吸収作用機構に関する研究」

【編集後記】

新しい編集委員会になって初めての支部ニュー
スがようやくでき上がりました。新メンバ
ーで話し合い、会員の皆様におもしろく読んで
いただけるよう工夫してみました。具体的
には、フォーラムを1つのテーマに絞って論じ
てもらい、留学中の若い研究者の海外生活を
紹介する「海外会員便り」を設ける、等です。
“あまり変わりばえないね”という声も聞
こえてきそうですが、いかがでしたか。本号
を読んでものご感想、ご提案、フォーラムに
関するご意見等、何でもお気づきの点がありま
したら、お気軽に関東支部事務局までお知ら
せ下さい。(K. K.)

日本細菌学会

関東支部ニュース

第31号

(1998. 5. 15)

発行：日本細菌学会関東支部

〒162
-8666 東京都新宿区河田町8-1

東京女子医科大学

微生物学免疫学教室内

支 部 長 内山竹彦

編集責任者 川原一芳

Tel 03-3353-8111 (内線22713)

Fax 03-5269-7411
